

氏名	中嶋 達郎
ヨミガナ	ナカジマ タツロウ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第365号
学位授与年月日	令和4年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 第二次世界大戦以前の日本における吹奏楽曲創作の実態 〈作品〉 《「METRO」あるいは「楽園へのファンファーレ」》ソロ・オーボエ、ソロ・クラリネット、ソロ・バスーン、エレクトロニクスと吹奏楽のために

論文等審査委員

（主査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	小鍛冶 邦隆
（副査）	東京藝術大学	教授	（音楽研究科）	塚原 康子
（副査）	東京藝術大学	学術研究員		橋本 久美子
（副査）	東京藝術大学	准教授	（音楽研究科）	折笠 敏之

（論文内容の要旨）

現代の日本の音楽業界において、一つの大きなジャンルとなっている「吹奏楽」では、現在では毎年多くの楽曲が、国内において創作されている。

しかしながら、約150年に渡る日本の吹奏楽の伝統の中で、日本でも数多くの吹奏楽のための楽曲が創作されてきたはずだが、第二次世界大戦以前に創作され演奏されていた吹奏楽曲に関しては、そもそも戦後から現在に至るまで楽譜どころか演奏記録、どのような楽曲が存在していたのか断片的な情報しか伝わっておらず、研究も限られているため、個々の詳細が明らかになっていない状況である。また、戦前の吹奏楽曲の戦後の処遇については、戦前の吹奏楽の社会的なあり方を論じる中で触れられている研究はあるが、個々の楽曲を取り上げて具体的に論じているものは未だ少ない。

しかしながら、残された演奏会の記録等の断片的な情報からは、実際は戦前の日本でも多くの吹奏楽曲が創作されていた様子を推測することができる。

本研究では、当時の雑誌や放送記録から楽曲をリストアップし、実際の楽譜資料の分析もおこなうことで、戦前の吹奏楽曲のレパートリーの特徴と、特に純器楽曲としての吹奏楽曲の創作がどのようになされていたのか、それらが戦後にどのような立場におかれたのかを検証し、第二次世界大戦以前の日本における吹奏楽曲創作の実態を明らかにすることを目指した。個々の楽曲の調査に先立ち、まずは第二次世界大戦以前に作曲された楽曲を収集し、リストの作成を行った。

本論文の構成は次の通り。

第1章では、作成した楽曲リストの概要と、楽曲リストから明らかとなった第二次世界大戦以前の吹奏楽曲全体としての傾向、特徴を分析し、全体像を把握することを目指した。

第2章では、吹奏楽の編成について検証した。当時の吹奏楽の編成は、必ずしも統一された編成ではなく、喇叭鼓隊、鼓笛隊などの編成も、広義の吹奏楽編成として組み込まれていたため、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲は、どのような楽器編成を想定しながら作曲されたのかを探っていく上で、当時の雑誌の論説や楽器法関連書籍をもとに整理を行った。

第3章では、楽曲リストをもとに、明治期から第二次世界大戦以前までの吹奏楽曲を個別に取り上げ、吹奏楽曲創作の実態を明らかにするとともに、雑誌記事に見られる吹奏楽曲創作に関する論説を取り上げ、吹奏楽曲創作の場がいかに形成されていったのか考察を行った。

第4章では、実際の楽譜を用いての編成や作曲様式の調査、分析を通して、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲全体から見える特徴を探った。

第5章では、第二次世界大戦直後の放送・演奏記録や、レコードの発売状況に着目し、戦前に創作された吹奏楽曲が戦後どのように扱われるに至ったかを検証した。

この研究からは、第二次世界大戦以前の楽曲の作曲者は、陸海軍軍楽隊関係者でその割合の半数以上を占めている一方、民間出身者も多数の楽曲が生み出されていることが判明した。放送記録や雑誌からは、特に第二次世界大戦期に新曲の発表・出版が集中している様子を、具体的に裏付けることができた。

第二次世界大戦後の演奏記録を見ると、戦後に、これらの楽曲が一斉に排除されたということではなく、一定のステータスを持った楽曲は現在でも演奏されていることがわかる。戦後の日本においては、アメリカの吹奏楽を規範に編成の規格化をはかった。さらに、高度成長期以降の、いわゆる「シンフォニック・バンド」指向の中で生まれた「ミリタリー・マーチ」軽視のような考えも、行進曲が大多数であった戦前の楽曲離れを後押ししたと考えられる。このため、戦前の楽曲の大多数は、この時期に楽譜の再出版を契機に編成を見直す等の「現代への適応化」を行うことができなかった。さらに1960年代後半からの作曲公募の興りとともに、日本人による吹奏楽曲の創作が再び盛んになったこともあり、戦前の楽曲は、戦後の編成の変化と規格化が進む時点で、レパートリーとして定着することができず、結果としてその多くが復活の機会を逸することとなったのではないかと推測した。

現在の日本では、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲に対して純粋に音楽的観点から論じられ、評価されることが少なく、その要因としては、調査可能な楽譜資料へのアクセスが限られていることであると、私は今回の調査から感じた。特に吹奏楽曲の所蔵数は、限られている現状である。今後の希望としては、このデジタル社会の中で、各所に散逸しているであろう、第二次世界大戦以前の吹奏楽曲資料のアーカイブ化が推進され、楽譜資料の調査が行いやすくなることで、先人たちの音楽的功績が広く認知されるような機会が来ることを期待したいと考える。尚、本論文は戦争を賛美するものでも、戦前の作曲家の行動を批判するものでもない。本研究は、日本の吹奏楽曲に関して、埋もれつつある歴史的な事実を明らかにし、作曲を専門とする立場から客観的な考察を行うことを目指したものであり、音楽分野に限らず今後の様々な研究の一助となれば幸いである。

(総合審査結果の要旨)

中嶋達郎による博論「第二次世界大戦以前の日本における吹奏楽曲創作の実態」は、今日の中高、大学を中心とする吹奏楽ブームからは想像しにくい、明治政府の国策に直接関わる「軍楽」(陸海軍楽隊の設置)と、国民一般の「洋楽」受容の演奏活動としての複雑な経緯をもつ、日本の「吹奏楽」の歴史性を明らかにしているものである。

とくに戦後における軍解体や価値観の変化から、戦前の資料(楽譜、音源他)の多くが失われたり散逸しているため、中嶋はあらためて綿密な調査にもとづく一覧(作曲者、曲種、曲名、演奏記録、出版、音源他)を作成して、戦前の吹奏楽史の俯瞰を試みた。

また、これまで対象にされることが限られていた、東京音楽学校と吹奏楽の関わりも取り上げることで、戦前の音楽活動の全体像の構築にも重要な貢献をしたものと言えるが、今後このデータを活用し(とりわけアーカイブ化を前提とした)、さらなる研究の進展が望まれる。

当論文が終戦後の一時期までの研究である以上、今日の「吹奏楽」にとって重要である、このジャンルの戦後の変化や、欧米の吹奏楽作品や演奏との関連性にも進めて行くべきであろう。

しかしながらこれまで漠然としか分からなかった戦前の吹奏楽の実態を、綿密な資料調査と、音楽作品の具体的な分析、対比によって、実像を明らかにした研究は、他査読者からも高い評価を得たことから、優の成績とした。

また修了作品《「METRO」あるいは「楽園へのファンファーレ」》は、作曲科部会で審査され、同様に優の成績とした。

同作は、中嶋の研究分野でもある、エレクトロニクス(コンピュータ)を応用(援用)した作曲法を、木管楽器ソログループのライブエレクトロニクスと吹奏楽で実現したものである。

現在の大学院作曲科における、折笠先生を中心とする新たな学習プログラムの成果であると同時に、今後の吹奏楽創作の新しい可能性の重要な一歩となるであろう。